



TITLE:

白居易「池上篇并序」論：あわせて  
自適の空間を定義する幾つかの表  
現について

AUTHOR(S):

二宮, 美那子

---

CITATION:

二宮, 美那子. 白居易「池上篇并序」論：あわせて自適の空間を定義する幾つかの表現について. 中國文學報 2007, 73: 14-38

ISSUE DATE:

2007-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177992>

RIGHT:

## 白居易「池上篇并序」論

——あわせて自適の空間を定義する幾つかの表現について

二 宮 美 那 子

京都大學

はじめに

「池上篇并序」〔卷三七 補入・2928〕<sup>①</sup>は、大和三年（八二九）、太子賓客分司となり洛陽詰めになった白居易が、履道里の邸宅を題材として詠んだ作品である。この邸宅は、長慶四年（八二四）、太子左庶子分司の官職に就いた際に購入していたものであった。「池上篇并序」を書いたとき白氏は五十八歳、致仕にはなお時があり、就いたのは「官は優にして祿料有り、職は散にして羈縻無し」（詠所樂）〔卷二九 格詩歌行雜體・2980〕と言う、いわば名譽の閑職である。作品中では、洛陽遷居に当たって、この地で

残りの人生を思うさま悠々と生きようという暢びやかな心情が詠われる。本論では、この「池上篇并序」が描く世界を中心に据え、あわせて白居易が自適の空間を詠う際に特徴的な、幾つかの表現方法を取り上げて論じてみたい。

「池上篇并序」を取り上げた先行研究として、埋田重夫氏「白居易「池上篇」考——水邊の時空と閑適の至境——」<sup>②</sup>が挙げられる。氏の研究は、居住空間において池を題材とする多数の詩篇、その全體を考察の対象とし、白居易文學における池畔の意義を説明するものである。本論では、この埋田氏の研究を参考にしつつ、「池上篇并序」という一篇の作品に焦點を當てる。これは、後述するようにこの作品が、白居易の住處を描く數多の作品の中で、特に注目し値すると思われるからである。埋田氏の研究の中でも「池上篇并序」に特に一章を割いて分析されているが、それは主に、何を描いているか、という内容の分析である。本論では、この一篇の作品が、どのような言葉・表現を使つて一つの世界を描き上げているかに特に重點をおいて分析し、また白居易閑適文學におけるその意義を考えてみ

たい。

## 一 作品の概要

### (一) 「池上篇并序」について

自己のいる場所を描き、それが處世觀や價值觀を言うことにはほぼ直結するというのは、隱逸文學の傳統の一つと言つて良いだろう。白居易は、その大量に残された作品世界のなかで、自己のいる場所、居住空間を繰り返し語った詩人である。居住空間を描くことは、白居易の、特に閑適の文學において、中心的な位置を占めている。<sup>④</sup>

このような白居易作品の中でも、この「池上篇并序」は特に注目し値する作品だと考えられる。まず指摘されるべきは、形式の獨特さと規模の大きさであろう。白居易は、長安、江州、洛陽……と住處が變わるごと、住居そのものの、また書齋や庭園などを題材とする作品を数多く作っているが、江州で作られた「草堂記」〔1472〕など一部の例外を除けば、それらはみな五言または七言詩の形式を取る。長

い序文のあとに四言をメインとする雜言詩という形式を取るのとは、二度目の分司の職を得た際に新たに書かれた、この「池上篇并序」のみであり、このような形式は大量の白居易詩の中で他に類を見ない。作品は、形式だけを見るなら、長い序文を伴った「銘」や「贊」に近いが、その内容や書きぶりは平易で自由闊達であり、「銘」や「贊」とは全く異質のものである。白居易の創意によるところが大きいと考えられるこのような形式面については、序や韻文部分を見ていく際に再度觸れたい。

また規模の大きさという面で言えば、韻文部分で描かれる境地と強い補完關係を持つている序文は、そのみで作品として成立するほど長い。白居易の住處に關する文と言えば、江州司馬時に書かれた「草堂記」があるが、この「池上篇并序」の序文は「草堂記」と並べて遜色ないほどのボリュームを持つているのである。それ故にか、この作品を詩ではなく「序」に分類する見方もある。<sup>⑤</sup>

形式や規模の他に更に付け加えると、この作品が結果として、長の「流浪」——理想の住居探し——の果てによう

やく辿り着いた住まいで、年齢、立場を鑑みてもこれからは吏隱の生活を謳歌しようとする、そのほぼ起點となると書き書かれた作品であるという點も重要である。これからのち白居易は、洛陽において廣義での「閑適詩」を、友人との交流の中、また季節や風景を愛でながら次々と繰り返し、時に放恣に傾きもする晩年の詩境が形成されていくのである。

## (二) 題名について

題名になっている「池上」とは、池の邊、または池の上とも譯されようが、詩語としては珍しいものではない。唐詩の中でも、宴席が庭園などの水邊に敷かれることが多いことから、宴の詩にはよく使われる表現のようである。しかし、白居易作品における「池上」の意味はこれに止まらない。池という題材は白居易にとって非常に重要な意味を持つており、「池上」という言葉を詩題に冠する作品も数多い。「池上」にたゆたい、池邊に運び込まれた様々なものと、時に對話し時に一體化しながらゆつたりと過

す境地こそが、洛陽における閑適詩の中核を占めているのである。

題名に關してもう一點問題となるのは、「一篇」という名付け方である。「一篇」という題名を持つ作品として、一般に想起されるのは樂府詩篇であろう。「白馬篇」「輕薄篇」など、傳統的な詩題に則り綴られる五言または七言の詩篇は、唐代にも多く作られている。但し、次節で引く本文を見ても分かるように、白居易の「池上篇并序」の長い序文、そして四言の韻文部分の自由・平易で流れるような「口調」は、美刺・詠物などを詠うこれらの樂府作品とは距離がある。このように、一見形式などが異なる作品に「一篇」という題名をつけた點にも、白居易の工夫が感じられる。以下、作品を見ていく際にも觸れるが、時間軸に沿って語られる序文、それを受けて完結する韻文部分に、白居易は、樂府の持つ敘事性、物語を語るような調子を見ていたのではないだろうか。

このような後世からの考察とは別に、この作品が生まれ、そして名付けられる経緯は、序文の中で白居易によって既

に語られている。それによると、池の邊で宴會をし、うたた寝のあと目覺めて口ずさんだものが韻文になったので、「池上篇」と名付けた、と言う。ただしここで注意したいのは、この作品に描かれるのはあくまで、池を中心とした洛陽履道里の住まい全體と、それによつて宣言される自己の有りようだということである。池はこの作品で、大きく豊かな廣がりを持った自適の地の言い換えとして機能している。ここでは、題名は作品（本文）を定義するだけでなく、逆に作品によつて特別な意味を與えられているのである。

このように、「池上篇并序」は、様々な面において白居易の創意と意欲が強く感じられる作品である。

## 二 序文と本文

長い序文に續いて四言の韻文という形式を取る「池上篇并序」だが、ここではまず序文から見ていこう。便宜上三段に分ける。

都城風土水木之勝在東南偏、東南之勝在履道里、里之勝在西北隅、西開北垣第一第、卽白氏叟樂天退老之地。地方十七畝、屋室三之一、水五之一、竹九之一、而島樹橋道聞之。

初樂天既爲主、喜且曰、雖有臺池、無粟不能守也。乃作池東粟廩。又曰、雖有子弟、無書不能訓也。乃作池北書庫。又曰、雖有賓朋、無琴酒不能娛也。乃作池西琴亭、加石樽焉。樂天罷杭州刺史時、得天竺石一、華亭鶴二以歸、始作西平橋、開環池路。罷蘇州刺史時、得太湖石、白蓮、折腰菱、青板舫以歸、又作中高橋、通三島逕。罷刑部侍郎時、有粟千斛、書一車、泊臧獲之習筦聲絃歌者指百以歸。先是潁川陳孝山與釀法酒、味甚佳。博陵崔晦叔與琴、韻甚清。蜀客姜發授秋思、聲甚淡。弘農楊貞一與青石三、方長平滑、可以坐卧。

大和三年夏、樂天始得請爲太子賓客、分秩於洛下、息躬於池上。凡三任所得、四人所與、泊吾不才身、今率爲池中物矣。每至池風春、池月秋、水香蓮開之旦、露清鶴唳之夕、拂楊石、舉陳酒、援崔琴、彈姜秋思、頽然自適、

不知其他。酒酣琴罷、又命樂童登中島亭、合奏霓裳散序。聲隨風飄、或凝或散、悠揚於竹烟波月之際者久之。曲未竟而樂天陶然已醉、睡於石上矣。睡起偶詠、非詩非賦、阿龜握筆、因題石間。視其粗成韻章、命爲池上篇云爾。

（洛陽城の風土・水木の勝景は東南の偏にある。東南の勝景は履道里にある。里の勝景は西北の隅にある。西の門から北垣に沿って一番目の屋敷が、白氏の叟樂天の隱居の地である。土地は四方十七畝、住居がその三分の一、水がその五分の一、竹がその九分の一、島、樹木、橋や步道がその間を縫う。

樂天がこの場所の主になつたばかりの時、喜びそして言うには、「臺や池が有つても、穀物が無ければそれを守ることができない」。そこで池東の穀物庫を造つた。また言うには、「子弟が有つても、本が無ければ彼らを教えられない」。そこで池北の書庫を造つた。また言うには、「來客や友人が有つても、琴や酒が無ければ彼らと樂しむことができない」。そこで池西の琴亭を造り、石造りの酒樽を添えた。樂天は杭州刺史を辭す時、天竺石一つ、華亭鶴二羽を手に入れて歸り、始めに西平橋を造

り、池邊をぐるり取り巻く小道を開いた。蘇州刺史を辭す時、太湖石・白蓮・折腰菱・青板舫を手に入れて歸り、更に中高橋を造り、三島への道を通した。刑部侍郎を辭す時、穀物を千斛、本を車一臺、それから召使いで、樂器や歌を學んだ者百人を連れて歸つた。始めの頃、潁川の陳孝山が醸した酒を贈ってくれ、その味は大層旨いものだった。博陵の崔晦叔が琴を贈ってくれ、その響きは太層清らかであった。蜀の人姜發が「秋思」曲を傳授してくれ、その響きは太層淡やかであった。弘農の楊貞一が青石を三つくれたが、長方形の石は平たく滑らかで、座つたり寢そべつたりできるものだった。

大和三年夏、初めて樂天は求めて太子賓客となり、洛陽の地に財産を投じ、池上に身體を休めることができた。三たびの任で得たもの、四人から與えられたもの、そして我が不才の身は、今悉く池中のものとなつたのである。風が池を渡ってくる春、月が池に映える秋、水香り蓮開く朝、露清く鶴鳴く夕ごとに、楊氏の石を拭い、陳氏の酒杯を舉げ、崔氏の琴を手にし、姜氏の「秋思」の曲をつま弾く。酔っぱらつてごきげんで、他のことなど一向氣にしない。酒たけなわにして琴が止むと、今度は

樂童たちに命じて中島亭に登らせ、霓裳散の序を合奏させる。音楽は風に乗って漂い、集まりまた散じ、竹林のもや、波間の月の間をゆつたりと流れること久しい。曲が終わらない内に樂天はうつとりと酔っぱらい、石の上で眠ってしまう。目醒めてふと詠いだすが、詩ともつかず賦ともつかず、阿龜が筆を握って、それを石の上に題する。それが大方韻文となっているのを見、名付けて「池上篇」とした。）

長い序文の一段目、都城という囲まれた場所、更にその中でも東南の隅……と、「地の勝」である場所を擧げていき、辿り着いた所こそ自身の餘生のための地であることを言う。このように次第に視點を寄せていき、最終的に主題となる場所に焦點を當てるという手法は、白居易の景物を描いた他の散文作品、「冷泉亭記」〔198〕や「草堂記」の頭の部分と共通するが、この序文の場合は入れ子のような構造が強く意識されているのが特徴的である。この表現により先ず四方を囲まれた空間が現出し、それは、作品が持つ内部で完結した幸福な雰圍氣を生み出す、一つの大きな

要因となっている。白居易は、「分司」「司馬」や「白尹」など、自己を場合に應じた多様な呼び方で客體化すること、作品に輕みや物語性などを持たせる表現を好んで用いる。ここでの自稱も、入れ子構造の中心にあるのは「白氏叟樂天」の退老の地、と表現することにより、文章に獨特の輕やかさや暢びやかさ、物語性を與えている。續けて白居易作品の特徴の一つである數字を多用した表現で、大まかな様子が紹介され、ここに洛陽履道里邸を描く下地が整うのである。續いての第二段では、これまで自分がいかにこの「池上」の住居を造ってきたか、これまでの任地で自分が誰から何を手に入れたかなどを、同じ句式の繰り返しで敘述する。これはいわば、自身の構築と獲得の歴史の紹介である。入れ子の中心、囲われた場所に詰め込まれるべきものごとが、具體的な名を伴って次々と登場し、白居易が自適の生活を描くためのお膳立てがここに整う。最後の第三段では、これらのものと共に今「池中の物」となった白自身、そこで日ごと悠々と過ぐすさまが描かれ、口ずさんだものがたまたま韻文になった、と四言詩の部分につ

ながつていく。

序文の語句は全體に平易であり、また同じ句作りを多用して非常に通りの良い文章になっている。白居易が「池上」を構築していく過程が、順序を追つて語られていく様は、ひとつの物語を聞いているような雰囲気がある。まず注目したいのが、使われている語彙がごく個人的なものであるという點である。つまり、例えば「天竺石」にせよ「太湖石」にせよ、恐らく白居易とその周邊の人々によつてのみ價值を見出され認められているものであると考えられ、そのような名詞の羅列が、この文章のごく私的な雰囲気氣を決定づけているのである。

文章は更に續いて、それらのコレクションと自己が共に「池中の物」となる、と述べるに到る。これは、石や鶴を度々自己の伴侶として描く白居易にあつても、特に注目される表現であろう。「池中の物」という表現は白居易の他の作品にも出てくる。「池上篇并序」の數年後に書かれた長編「詠興」詩の四首目、「四月池水滿」（大和七年 洛陽）〔卷一九 格詩歌行雜體・2955〕では、池にいる魚や龜に語

りかけ、「況んや吾と爾の輩、本より蛟龍の正ただにあらず。假如もし雲雨の來たるも、祇ただ是れ池中の物なり」と詠う。ただし、この句と比べると「池上篇并序」の「池中の物」は、典故をどの程度踏まえているのか判斷するのが難しい。典故によつて喚起される意味づけよりも、自己を「物」の集合の中に嬉々として並び入れてしまふ姿そのものが、強調されているように感じられるのである。自己を物と同列に並べ數えるという態度は、後世で言えば歐陽修「六一居士傳」と共通する自己認識である。<sup>⑩</sup>ただし白居易は、歐陽修のように自分でその所以を語りはせず、序文は續けて「池中の物」となった白居易がその境地を樂しむ姿を描くのみである。唐突とも思えるような表現ではあるが、これによつて、序文を見てきた際に述べた、一種の物語を語るような口調は更に強調される。序文で構築と獲得の歴史を語る中で、作品としての舞臺設定が次第に整っていく。その中で白居易は、獲得されたものたちと同様、「池中」の登場人物よろしく自分をもその中に並べ入れてしまふのである。



序文の末尾には、自分がこの池上での一年、一日をいかに楽しむかと言うことを言うが、ここに至って特定の日時を示す時間の概念が取り拂われ、巡る季節のなか、永遠に続くかのような楽しみが描かれる。では次に、その中で生まれたとされる四言の韻文部分を見てみよう。

十畝之宅

十畝の宅

五畝之園

五畝の園

有水一池

水の一池有り

有竹千竿

竹の千竿有り

勿謂土狹

土の狹きを謂う勿かれ

勿謂地偏

地の偏なるを謂う勿かれ

足以容膝

以て膝を容るるに足り

足以息肩

以て肩を息ますに足る

有堂有亭

堂有り 亭有り

有橋有船

橋有り 船有り

有書有酒

書有り 酒有り

有歌有絃

歌有り 絃有り

白居易「池上篇并序」論（二宮）

有叟在中

叟の中に在る有り

白鬚飄然

白鬚 飄然たり

識分知足

分を識り 足るを知り

外無求焉

外に求むる無し

如鳥擇木

鳥の如く木を擇びて

姑務巢安

姑く巢を安んじるに務む

如鼯居坎

鼯の如く坎に居りて

不知海寬

海の寬きを知らず

靈鶴怪石

靈鶴 怪石

紫菱白蓮

紫菱 白蓮

皆吾所好

皆な吾れの好む所

盡在我前

盡く我が前に在り

時引一杯

時に一杯を引き

或吟一篇

或いは一篇を吟ず

妻孥熙熙

妻孥 熙熙たり

雞犬閑閑

雞犬 閑閑たり

優哉游哉

優なるかな 游なるかな

吾將終老乎其間

吾れ將に其の間に老いを終えん

一讀してまず印象的なのは、その通りの良さと滑らかなリズムである。序に言う「睡起して偶たま詠じ、詩に非ず賦に非ず」という雰圍氣そのままに、白居易の満足感が柔らかく、しかし明確に傳わってくる。序文と合わせて、閉ざされた平和で親密な空間がここに完成するのである。

ところで、四言という韻文形式は、多くは改まった内容を言うときに用いられる。この作品において四言の表現が用いられるのも、作品が、自分が今後いかに過ごすかをいう「宣言」としての意味を持っているからだと考えられる。但し、本文を見ると分かるように、その表現はあくまで平易で暢びやかである。四言のリズムの連續の中で、最後に結びとしておかれる破格の句、これも宣言の總括として非常に効果的である。

前半部分には、「有水一池、有竹千竿」と舞臺設定を終えた上で、「有叟在中、白鬚飄然」に繋がるくだりがある。これは、ある條件、環境を持った空間をまず現出させ、次にその中にいる人物にスポットを當てるという手法だが、江州で書かれた「香爐峰下新置草堂卽事詠懷題於石上」詩

(元和二年)「卷七 閑適・003」の前半部分も似たような結構を持っている。以下に引用してみよう。

香爐峰北面	香鑪峰の北面
遺愛寺西偏	遺愛寺の西偏
白石何鑿鑿	白石 何ぞ鑿鑿たる
清流亦潺潺	清流 亦た潺潺たり
有松數十株	松有り 數十株
有竹千餘竿	竹有り 千餘竿
松張翠繖蓋	松は翠の繖蓋を張り
竹倚青琅玕	竹は青き琅玕を倚す
其下無人居	其の下 人の居る無く
惜哉多歲年	惜しいかな 多歳の年
有時聚猿鳥	有時 猿鳥聚まるも
終日空風烟	終日 風烟を空しくす
時有沈冥子	時に沈冥子有り
姓白字樂天	姓白 字樂天
平生無所好	平生 好む所無きも

見此心依然 此れを見て 心 依然たり

如獲終老地 終老の地を獲しが如く

忽乎不知還 忽として還るを知らず

……

具體的な數字で表現される舞臺が描き出され、その中にいる「自己」が登場した後は、彼を主語として詩が展開していく。主人公を言う句に、いずれも「白」の字が使われている点にも注目したい。後の論でも觸れることになるが、江州廬山を描くときに使用される表現と、洛陽履道里を描く際に使われるそれとは、指摘すべき共通點が多く、特に注目される。

さて、白居易文學には、同時代の他の詩人に比べて異例に多い詩文の中で、類似した表現・思想をしばしば繰り返す——しかもその表現・思想は、一生を通してぶれることが少ない——という特徴が有り、この「池上篇并序」<sup>⑩</sup>でもそれは例外ではない。例えば、自己の居る土地は狭くて邊鄙だがそれに満足していると言うこと、また「識分知足」

などの道家的な處世哲學は、白居易文學の中ではいずれもなじみの表現であろう。更に、「有○有○」という表現で綴られていく堂、亭、橋、船、書、酒、歌、絃はいずれも閑適詩の題材として、個別にまた組み合わされて様々に詠われるものであるし、そのあとで羅列される靈鶴、怪石、紫菱、白蓮は白居易閑適生活の缺くべからざる相棒として詩文にしばしば登場する。つまり、ここで内容面のみ見れば、特に目に止まる新奇な點は皆無と言って良い。しかし逆に言えば、ここで提示される一つ一つの思想また題材は、それぞれが獨立・分散して一篇の詩の中に描かれ得るものであり、それらが凝縮され、集結しているという點が却って目を引くのである。序文での構築と獲得の詳細な説明を受けて續く四言のこの部分は、平易な表現であるが故にその他の詩文からは際だって直截的であり、また幸福の姿を表して高度に概念的でもある。

さて、以下特に注目したいのは、この韻文部分において、白居易が自適の空間を區切り、定義するために用いた幾つかの表現である。長編「池上篇并序」には、閉ざされ獨立

し、過不足無く調和した世界が描き出されている。この空間を生み出すのに大きく寄與している幾つかの表現方法を、その他の白居易作品の中に置いて再検討してみることにより、「池上篇并序」をより豊かに讀むことができるのではないか。またそれを通して、白居易がいかにして自適の空間を定義するか、ということもあわせて考えていきたい。

### 三 自適の空間を定義する表現

#### (一) 「全て目の前にある」幸せ

先ず取り上げるのは、「靈鶴怪石、紫菱白蓮。皆な吾れの好む所、盡く我が前に在り」、杭州、蘇州から持ち歸ってきた愛好物たちが、悉く自分の目の前にある、という表現である。この句に到る前の部分で、土地の狭さを是とし、そこに籠って自足することが詠われるが、この二句で「手に届く場所に自分の好む物がある」と言うことにより、池上の空間は更に凝縮されその親密さを増す。

このような表現方法の用例として確認し得た、最も早い

例は、詩ではなく江州にて書かれた手紙の一節である。

前月中、長兄從宿州來。又孤幼弟姪六七人、皆自遠至。……此亦默默委順之外、益自安也。況廬山在前、九江在左、出門是滄浪水、舉頭見香鑪峯。東西二林、時時一往。至如瀑水、恠石、桂風、杉月、平生所愛者、盡在其中。此又兀兀任化之外、益自適也。今日之心、誠不待此而後安適。況兼之者乎。

(先月中には、長兄が宿州からやってまいりました。また、幼く身よりのない甥や姪六七人が、みな遠方より集まってきました。……このことはまた、押し黙って流れに委ねることは別に、ますます安らかな氣持ちにさせてくれます。ましてや、廬山はすぐ前、九江(江州)は左に、門を出ればすぐに長江の流れがあり、頭をあげれば香鑪峯が見えるのですから。東林寺・西林寺にはたびたび足を向けます。瀧や奇怪な岩、桂を渡る風や杉にかかる月といった、普段から好むものごとに至っては、すべてこの内に有るのです。このことはまた、じいっと變化に

任せていることは別に、ますます楽しい気持ちにさせてくれます。今の私の気持ちは、これらのことが無くても本當に安らかで楽しいものです。ましてやこの二つが揃えばなおさらです。」

〔答戸部崔侍郎書〕〔148〕

この手紙は元和十一年（八一六）に書かれたものとされる。崔侍郎とは、白居易と共に翰林學士になった崔羣のこと。「默默委順」「元元任化」というのは、引用部分の前で左遷されてからの自分の心境を言う際に使った表現を受けて言っている。心の安定をもたらしただけとして、自己の精神の淨化と共に、親戚の集結や景物の美しさを擧げているのである。

續いて確認できた例は、同じく江州で、元稹に宛てて書かれた手紙、「與微之書」〔148〕の一節である。白氏文集の中では、元稹に宛てて書かれた手紙には他に有名な「與元九書」〔148〕があるが、「與元九書」が、これまでの文學者としての遍歴や文學觀など、比較的にかしまった内容に傾くのに對し、この書には、切々とした情愛に溢れた私

的な手紙という趣がある。該當する部分の具體的な内容は、「答戸部崔侍郎書」とほぼ同じである。自身が江州で恙なく過ごしていることを「一泰」「二泰」として數え上げながら述べる部分で、親戚が集まってきたことに觸れて、

…頃所牽念者、今悉置在目前、得同寒煖飢飽。此一泰也。  
（以前より氣に掛けていた者たちを、今すべて目の届くところに置いておき、暮らしを共にすることができます。これが一つ目の安らぎです）

と言い、また廬山の景物がいかに美しいかをつらつらと述べたあと、

…大抵若是、不能殫記。每一獨往、動彌旬日。平生所好者、盡在其中。不唯忘歸、可以終老。此三泰也。

（大まかなところはこのようなですが、とても全ては書き記せません。一人そこに行く度に、ややもすれば十日も滞在してしまいます。普段から好んでいるもの、全てがその内にあるのです。

歸るのを忘れるのみならず、そこで老いを迎えられられると思われるほどのです。これが三つ目の安らぎです。

と言う。これらの手紙の中では「目の前に有る」のは身内の者たちであり、景物の方は「盡く其の中に在る」という表現になっているが、名詞の羅列から「今全てその中にある」とつながるといふ形式は、「池上篇并序」の句式と類似している。この表現の特徴は、自分の目の前の空間を強く肯定する點にあり、前に置かれる親戚、また景物や愛好物の羅列表現は、肯定感を生み出すための條件である。

さて、調査の及ぶ限りでは、江州期から「池上篇并序」が書かれた期間までには似た表現、言い回しは見あたらない。つまり、江州での友への手紙の中で生まれたこの表現は、長い時間を経て「池上篇并序」の韻文の中で再び顔を出したと考えて良いと思われる。兩者は、片や手紙、片や韻文であるし、片や江州の苦境における友人とのやりとりから、片や洛陽の自適の生活から生まれた表現であるので、句の調子や、印象——前者の切實さ、後者の満足感——が

かけ離れているのは言わずもがなではある。しかし、いずれも眼前の空間を強く肯定するために使われている點では變わりない。左遷という喪失の後辿り着いた先で、「ここにはこれだけ素晴らしいものがあるのだ」と發見の喜びを言う表現は、時を経た洛陽で、獲得してきたものを自分の思い通りに眼前に並べ、その喜びと満足を謳う表現へと轉化していく。江州廬山は白居易が逃げ込んだ救済の地、洛陽履道里は自覺的な選擇と構築を繰り返した末の自適の地であるが、そのいずれに在っても白居易は、良いものごとだけを目の前に並べて、そこに満足を見出すのである。それではこの節の最後に、類似する表現が出てくる作品として、「池上篇并序」が書かれてから更に數年経ったあとに書かれたとされる詩を擧げる。

七月一日天	七月一日の天
秋生履道里	秋は履道里に生ず
閑居見清景	閑居 清景見われ
高興從此始	高興 此れより始まる

林間 暑雨 歇み

池上 涼風 起つ

橋竹 碧くして 鮮たり

岸莎 青くして 靡靡たり

蒼然 古磐石

清淺 平流水

何言 中門前

便是 深山裏

雙僮 侍坐卧

一杖 扶行止

飢聞 麻粥香

渴覺 雲湯美

(胡麻粥、雲母湯)

平生 所好物

今日 多在此

此外 更何思

市朝 心已矣

風景の美しさ、心配りの行き届いた環境、心に適った食

事、と續いたあとに現れる表現が、「全て」眼前にある、

ではなく「多く」ここにある、と變わっているのが面白い。

見つけられた一例のみから歸納するのは難しいが、閑適生

活が進む中、強い喜びを言う表現が、穩やかで餘裕のある

日常風景を言う語に變化している、ともとれるのである。

## (二) 「有」字の修辭

次に取り上げたいのは、「有」字を使った修辭である。

自己のいる空間(自分の今の情況とも言い換えられる)に

は何か「有る」かを言うこの表現は、單純でどこにでも使

われる句式ではあるが、作品の中で自分の空間を築くこと

に拘った白居易文學においては、獨特の現れ方をする。ま

た、「有」字を様々に使い分けることによって生み出され

る明解なりズムや論理は、平易と言われる白詩の特徴を形

作る由來の一つになっており、それが白居易特有の思考様

式につながっているとも考えられるのである。「池上篇并

序」の中には、その意味するところは異なるものの、實に

〔七月一日作〕詩 大和九年〔卷三〇 格詩・3038〕

十一文字もの「有」字が使われており、作品全體の喜びに溢れた雰圍氣を作り出す大きな要因となっている。それでは、「池上篇并序」の表現を最終目的地としつつ、白詩の空間構成、情景描寫に係る「有」字句で、特徴的なものを幾つか整理して見てみよう。<sup>⑬</sup>

【有十衣／食＝必要最低限のもの】

この表現が用いられる作品の境地は、いずれも「池上篇并序」の描くものとは質を異にするが、白居易の「有」字句を見る際には看過できない重要なもので、先ず取り上げる。

……

眞隱豈長遠 眞隱 豈に長遠ならんや

至道在冥搜 至道 冥搜に在り

身雖世界住 身は世界に住むと雖も

心與虛無遊 心は虛無と遊ぶ

朝飢有蔬食 朝飢うれば蔬食有り

夜寒有布裘 夜寒ければ布裘有り

幸免凍與餒 幸いにして凍と餓を免るれば

此外復何求 此の外 復た何をか求めん

寡欲雖少病 欲寡くして 少しく病むと雖も

樂天心不憂 天を樂しみて 心は憂えず

何以明吾志 何を以て吾が志を明らかにせん

周易在床頭 周易 床頭に在り

〔永宗里觀居〕詩 永貞元年 長安〔卷五 閑適・0179〕

驛吏引藤輿 驛吏 藤輿を引き

家僮開竹扉 家僮 竹扉を開ける

往時多暫住 往時 多く暫住なるも

今日は長歸 今日 是れ長歸す

眼下有衣食 眼下 衣食有り

耳邊無是非 耳邊 是非無し

不論貧與富 貧と富を論じず

飲水亦應肥 水を飲むも亦た應に肥ゆべし

〔歸履道宅〕詩 大和三年 洛陽〔卷二七 律詩・2725〕



眼下有衣兼有食  
心中無喜亦無憂  
匹如身後有何事  
應向人間無所求

眼下衣有り 兼ねて食有り  
心中喜び無く 亦た憂い無し  
匹如<sup>たと</sup>えば身後 何事か有らん  
應に人間に向かいて求むる所無かるべし

靜念道經深閉目  
閑迎禪客小低頭  
猶殘少許雲泉興

靜かに道經を念じて深く目を閉じ  
閑に禪客を迎えて小しく頭を低<sup>さ</sup>る  
猶お殘す少許の雲泉の興

一歲龍門數度遊

一歲 龍門 數度遊ぶ

〔偶吟一首〕詩之一 大和四年 洛陽〔卷二七 律詩・2775〕

引用した詩は永崇里の觀居、履道里の宅と、居所を題名に冠している。いずれも閑適的生活を詠う作品であるが、快適で喜びに溢れた自適の生活ではなく、現世的欲望を捨て、精神生活の充實を希求する境地を描いている。「有衣食」は自己の生活を保證する最低限の條件として提示される。

これらの例は、白居易文學の、どのような状況下に在る

白居易「池上篇并序」論（二宮）

うとそこに満足を見出すという特徴を良く表していると考えられる。というのも、これは引用の一首目に特に顯著だが、（粗末な）食事や衣服は普通、物質的な欲求を抑えた隱逸生活の高潔さを言うために使われるべきものである。故に、これらの食事・衣服という條件は、取るに足らないもの、最小のものでなくてはならない。ところがここで白居易は、飢えないだけの食べ物、凍えないだけの衣服、それらを「は有る」という言葉で捉えることによって、いわば逆説的に、満足感を表す表現へと轉換してしまうのである。このような表現によって、隱逸的空間と現實的な生活との距離もまたぐつと縮められている。

### 【有十閑適生活の樂しみ】

帝都名利場 帝都は名利の場

雞鳴無安居 雞鳴きて安居する無し

獨有懶慢者 獨り懶慢たる者有りて

日高頭未梳 日高くして頭未だ梳らず

……

旬時阻談笑 旬時 談笑を阻つれば

旦夕望軒車 旦夕 軒車を望む

誰能讎校間 誰ぞ能く讎校の間に

解帶卧吾廬 帶を解きて吾が廬に卧さん

窗前有竹玩 窗前 竹の玩ぶ有り

門外有酒沽 門外 酒の沽る有り

何以待君子 何を以てか君子を待たん

數竿對一壺 數竿 一壺に對す

〔常樂里閑居偶題十六韻兼寄劉十五公興王十一起呂二晃呂四

穎崔十八玄亮元九稹劉三十二敦質張十五仲方時爲校書郎〕詩

貞元十九年 長安〔卷一〕閑適・075

盡日前軒卧 盡日 前軒に卧し

神閑境亦空 神 閑にして境も亦た空なり

有山當枕上 山の枕上に當たる有り

無事到心中 事の心中に到る無し

簾卷侵床日 簾卷きて床を侵す日

屏遮入座風 屏は遮る座に入る風

望春春未到 春を望むも春未だ到らず

應在海門東 應に海門の東に在るべし

〔閑卧〕詩 長慶三年 杭州〔卷三〕律詩・2329

大隱住朝市 大隱 朝市に住み

小隱入丘樊 小隱 丘樊に入る

丘樊太冷落 丘樊 太だ冷落たり

朝市太囂諠 朝市 太だ囂諠たり

不如作中隱 如かず中隱と作りて

隱在留司官 隱れて留司の官に在るに

終歲無公事 終歲 公事無く

隨月有俸錢 隨月 俸錢有り

君若好登臨 君 若し登臨を好まば

城南有秋山 城南 秋山有り

君若愛遊蕩 君 若し遊蕩を愛さば

城東有春園 城東 春園有り

君若欲一醉 君 若し一醉せんと欲さば

時出赴賓筵 時に出て賓筵に赴け

洛中多君子 洛中 君子多く

可以恣歡言 以て歡言を恣にすべし

君若欲高卧 君 若し高卧せんと欲さば

但自深掩關 但だ自ら深く掩關せよ

亦無車馬客 亦た車馬の客の

造次到門前 造次 門前に到る無し

……

〔中隱〕詩 大和二年 洛陽〔卷二一 格詩雜體・2277〕

いずれの表現も、「有＋○」という短い句で閑適空間の姿を端的に、また單純に表しており、それによってある種の生活態度、空間を明示している。例えば引用した一首目では、「窓の外には愛でるべき竹があり、門の外には酒が（いつでも）手に入る」と、自由きままな暮らしができる場が存在することを端的に示唆している。また、最後に引いた「中隱」詩では、「もし散策が好きなら、街の南に秋のピクニックに適した山がある」と言うことで、中隱生活の樂しみを保證しているかのであるし、また繰り返し

の對句表現を使うことでその枠組みは單純化され、簡便な觀光案内のような趣さえ帯びる。「有」の後ろに置かれる酒や竹、山などは、それぞれが精神的意味を付與されうる、いわば閑適生活のシンボルであるが、それらが具體的にどのようなものか、またそれらをどのように樂しみ鑑賞するかなどは言われない。このような表現の單純さにより、竹や酒、山などは、詩の中で閑適生活の日常に組み込まれ定着するのである。また、「有」字句は後ろに置かれるものの物質的な面を強調し、例えば二首目のように「山」さえも身邊に引き寄せているかのような表現が見られる<sup>⑬</sup>。

閑適空間とは、基本的にそれに反する存在が常に對置されるもの、つまり、あくせくした官僚生活、名利を重んじる價值觀などと對比された上で成立するものであるが、ここでは「有」字句はそのような空間を保證する條件として用いられる。「有る」ということは、それを樂しむ境地にいられる、という條件の保證でもあるし、「有る」とわざわざ明示することによって、閑適空間に在ることの喜びがしみめられ、増幅されるのである。

「有十〇」表現には、他にも幾つかの句式のパターンが見られる。以下に挙げるのは、上に挙げた例と同様「有」の後ろに閑適生活の樂しみを置きつつ、否定詞を用いて逆の境地を言うものである。まず一例挙げる。

十年爲旅客 十年 旅客と爲<sup>なり</sup>

常有飢寒愁 常に飢寒の愁有り

三年作諫官 三年 諫官と作り

復多尸素羞 復た尸素の羞多し

有酒不暇飲 酒有るも飲むに暇あらず

有山不得遊 山有るも遊ぶを得ず

豈無平生志 豈に平生の志無からんや

拘牽不自由 拘牽せられ自由ならず

一朝歸渭上 一朝 渭上に歸し

泛如不繫舟 泛たること繋がれざる舟の如し

置心世事外 心を世事の外に置き

無喜亦無憂 喜び無く亦た憂い無し

……

〔適意一首〕詩之一 元和七年 下邳〔卷六 閑適・0236〕

青年期の流浪や官僚としての責務、それらはいずれも詩や山水などの樂しみを味わうことを許しきれなかった。

翻つて、服喪で故郷に歸っている今の、拘束のない自由さを喜んでいる。目の前に心誘われるものごとがあるのに、時間がないためそこに踏み込めないことを言うのに、「有〇不〇〇」という表現が使われている。<sup>⑬</sup>

次に挙げるのは、同じく「有十閑適生活の樂しみ」ではあるが、「慵（閑）」と言う別の要素が入り、更に複雑な境地を表すもの。二例挙げる。

門前少賓客 門前 賓客少なく

階下多松竹 階下 松竹多し

秋景下西牆 秋景 西牆に下り

涼風入東屋 涼風 東屋に入る

有琴慵不弄 琴有るも 慵くして弄ばず

有書閑不讀 書有るも 閑として讀まず

盡日方寸中 盡日 方寸の中

澹然無所欲 澹然として欲する所無し

……

〔秋居書懷〕詩 元和五年 長安〔卷五 閑適・0198〕

架上非無書 架上 書無きに非ず

眼慵不能看 眼慵くして看る能わず

匣中亦有琴 匣中 亦た琴有り

手慵不能彈 手慵くして彈く能わず

腰慵不能帶 腰慵くして帶する能わず

頭慵不能冠 頭慵くして冠する能わず

……

〔慵不能〕詩 大和四年 洛陽〔卷三 格詩雜體・2291〕

いづれも酒を飲んだり詩を詠んだりできる条件は有るのだが、「慵い」ためやらない、という。<sup>⑮</sup>この「慵」に少し觸れておくと、これはもちろん單なるものぐさ、なまけを言うものではない。嵇康「與山巨源絕交書」などの影響を

受け、規律に縛られた社會的なことを意に介さない態度を言う「慵」であるが、<sup>⑮</sup>注意したいのは、白居易詩では詩や酒、琴といった、官僚生活とは無關係の、餘暇・隱逸的生活に關わるもので「慵」であるためやらない、としている點である。更に、手が慵い、足が慵いと、肉體的なだるさを言う表現も見受けられる。白居易の「慵」は、隱者が示す「慵さ」を踏まえ、その上でより多様で具體的な氣分を表す際にも使われるようである。

ここまで様々な「有十閑適生活の樂しみ」句のパターンを見てきた。自分のいる側（場所、情況）⇨閑適的境地には何が「有る」かを言うこの表現は、詩に一定のリズムをもたらし、單純であるが故に自己の主張、情況を簡潔且つ明快に説明できる。閑適空間を「日常」として表現する一方で、「有る」ことによる喜びもまた増幅される。また、單純な句作りであるが故に、否定句と組み合わせられて更に踏み込んだ境地を表現することもでき、白居易はそのような表現も好んで用いたようである。これらのことを確認した上で、「池上篇并序」に戻って見てみよう。

ここに取上げたい「池上篇并序」の「有」字句は、「有堂有亭、有橋有船。有書有酒、有歌有絃」という羅列表現である。これもいわば、「有＋閑適生活の樂しみ」表現の一つのバリエーションと言えようが、この表現では今まで見てきたものとは異なる點がある。「有」字の後ろに來る堂や亭、橋、船は序文でその構築の過程が述べられ、

書や酒、歌、絃も、同じく序文でその獲得が描寫されている。つまり、「有」の後ろに置かれるものたちは、序文で構築・獲得の過程が詳細に記されると言う點においてきわめて具體的であり、故にまず強調されるのは、「ここまでは手に入れた」という所有と獲得の喜びであろう。また、この作品の「有」字句を、今まで見てきたものと同様、閑適空間を端的に表す表現と見ることができらば、ここで表されるのは獲得・所有の喜びを更に進めた、閑適生活を送る場所について、そこに完全に屬している喜びである。單純かつ明解な、「有○有○有○……」と言う疊みかけるリズムは、意味の上での通り易さと共に、作品が描く世界が、何の拘束や阻害物もなく思うさま樂しめる場所だと

強調しているかのである。四言のリズムがここでは非常に効果的である。一定のリズムを持った句の連續により、白居易は自己の理想とする閑適生活（空間）のビジョンとその物質的條件、そして今それらを手に入れ、その空間の中に在るといふ喜びを、これ以上はないと言ふほど明確に表現できるのである。

この「有」字句に注目すると、この作品の持つ明快な雰囲気が殊更に際立つ。韻文部分の形式面についてはこれまでも度々觸れてきたが、最後にもう一度振り返ってみよう。序文には、居眠りから醒めてご機嫌で口ずさみできたものだ、とあるが、我々が作品を讀むときには、それを額面通りに受け取つてはもろんならないだろう。四言という形式が選ばれたのは、「宣言」としての意味付け、また詠うような口調を生かすという目的と共に、複雑な描寫や轉折を容れない、單純な力強さを求めた結果ではないだろうか。四言のリズムは作爲を感じさせない輕やかな風情を湛え、聊かの構えたところも見せずに、單純かつ明確な自己の理想を伝える。ここにこの作品の巧みさがあると言え

るだろう。

## おわりに

先に、隱逸世界は基本的にそれに對置される世界と共に成立すると述べた。ここにきて氣付くのは、この「池上篇并序」にはそのような對置されるべき世界が、殆ど意識されていなく、言うことである。更に言えば、閑適空間にしばしば登場する、自己の精神修養に關わる言葉も、この作品には登場しない。あるのは、限られた空間をいかに構築し、充實させたかと言うこと、またその空間をいかに楽しみ守っていくかと言う宣言であり、外の世界のことは、恐らく意識的に、言及されていない。これは、物語を語るように描かれた散文部分、軽やかな宣言として發された韻文部分それぞれに、どのような言葉を使つて、いかに描くかという選擇を重ねた結果であり、かくして「池上」は閉ざされた理想郷としてその姿を現すのである。

作品の最後は、「優哉游哉、吾將終老乎其間」という句で結ばれる。白居易は、洛陽履道里のみならず様々な場所

を自己の「終老」の地であると詠う。<sup>①</sup>これは、自己の老いや終の棲家に非常な關心を寄せた白居易が、その時々的心情、またその作品が求める效果に従つて言葉を綴つていった結果であると考えられる。しかし、様々な「終老」の地の中で、この「池上篇并序」ほどまったき喜びを詠った作品は他になく、この作品はその形式の獨特さとメッセージ性の強さで、ひととき異彩を放つていえると言えらるだろう。「池上篇并序」は、白居易が獲得した自適の地を文學における表現世界として昇華したものであり、また同時に自己の處世のあり方の、力強い宣言文ともなっているのである。

## 註

- ① 引用詩文は謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）を底本とし、卷數と各卷の標題、また花房英樹による作品番號を付す。詩文の制作年代・場所もこの本の記述に據る。『校注』に採られていない散文作品については、『四部叢刊』本を底本とする。語句の檢索には、臺灣中央研究院の漢籍電子文獻・臺灣師大圖書館の「寒泉」を使用させていた。

- ② 『白居易研究年報』（創刊號、勉誠出版、二〇〇〇年）、の

ち「白居易研究 閑適の詩想」（汲古書院、二〇〇六年）收録。氏の研究は、題名を「白居易「池上篇」考」とされているが、「池上篇并序」一篇のみを研究対象とされているわけではなく、「池」を描く閑適詩全てを考察の対象とされている。これは、池上を描いた詩篇全體を、「池上篇」（池上）を描いた「詩篇」の意か）と言う單語で總稱しているのだらう。

③ 埤田氏の研究では、「池上篇并序」から認められる、履道里居における池邊風景の三つの性格を、以下のようにまとめる。一、作品中に描かれる水邊の風景は、豊かな経験とそこから導き出される確かな計畫のもとで、整備され改造された人爲人工の空間であった。二、白邸の池邊空間は、目的や用途ごとに分割された小領域の總結集からできている。三、作品中に描かれる住居や庭園は、瑞々しい生命の漲る生きた空間となっている。

④ 白居易の住居を描く作品を、各時代に沿って詳細に分析したものと、埤田重夫「白居易と家屋表現（上）——身體と居住空間を繋ぐもの」（『中國詩文論叢』一五號、一九九六年）、同「白居易と家屋表現（中）——身體と居住空間を繋ぐもの」（『中國詩文論叢』一六號、一九九七年）、同「白居易と家屋表現（下の）——詩人における廬山草堂の意義」（『中國詩文論叢』一七號、一九九八年）、同「白居易と家屋表現（下の）——詩人における長安新昌里邸の意義」（『中國詩文論叢』一八號、一九九九年）、同「白居易における洛陽履道里邸の意義」（『中國文學研究』二九號、二〇〇三年）がある。

⑤ 『四部叢刊』本、紹興本などは、「序」に分類する。本稿が底本とする『白居易詩集校注』は紹興本を底本としているが、「池上篇并序」は「謠」や「辭」、「吟」などを題名にもつ作品と共に、卷三七 補入に入れられている。

⑥ 既に觸れた埤田重夫「白居易「池上篇」考——水邊の時空と閑適の至境——」では、「池上詩」が白居易五十三歳から七十一歳の時まで間斷なく作り續けられており、その詩形は多種多様に渉る點が指摘されている。また、白居易にとって池畔は、「自らの出處進退を意義づける上で、最適の場になつて」おり、「水邊の清淨な雰圍氣」は白居易の「内部にある塵埃を濯ぎ流してくれ」、「一定の大きさで圍い込まれ、分節され、所屬を明示された私有池は、その持ち主にとって、我が身の如くかけがえのない親密な空間になり得る」とされている。

⑦ それぞれの冒頭部分を挙げる。

「東南山水、餘杭郡爲最。就郡言、靈隱寺爲尤。由寺觀、靈泉亭爲甲。……」（『冷泉亭記』）

「匡廬奇秀甲天下山、山北峯曰香鑪、峯北寺曰遺愛寺、介峯寺間、其境勝絕、又甲廬山。」（『草堂記』）

⑧ 例えば、「蓮石」詩（寶曆二年 杭州）〔卷二四 律詩・



2467]

青石一兩片、白蓮三四枝。寄將東洛去、心與物相隨。……領郡來何遠、還鄉去已遲。莫言千里別、歲晚有心期。など。このように、白居易に随つて各地へ運ばれる石、植物などへの愛情を示す詩篇は数多く見られる。

⑨ 注②で觸れた埋田重夫論文では、この句が『三國志』卷五四・周瑜傳のいわゆる「非池中物」の典故を踏まえていることを指摘され、「もともと蛟・龍に類しない自分たちは、たとえ雲・雨がやって来ても、天に向かって飛翔することはない」と述べ、官界での榮達を完全に斷ち切つて、魚共々「池中物」であり續ける生き方が選擇されている。」と解説されている。

「瑜上疏曰、劉備以梟雄之姿、而有關羽・張飛熊虎之將、必非久屈爲人用者。……今猥割土地以資業之、聚此三人、俱在疆場、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也。」(『三國志』卷五四・周瑜傳)

⑩ 「客有問曰、六一、何謂也。居士曰、吾家藏書一萬卷、集三代以來金石遺文一千卷、有琴一張、有棋一局、而常置酒一壺。客曰、是爲五一爾、奈何。居士曰、以吾一翁、老於此五物之間、是豈不爲六一乎。……吾爲此名、聊以志吾之樂爾。

……」(歐陽修「六一居士傳」)

⑪ 川合康三「韓愈と白居易——對立と融和——」(『中國文學報』第四十一冊、一九九〇年) には、白居易が各年代の作品

白居易「池上篇并序」論(二宮)

で、現在の年齢を最良のものとしている例を挙げ、「こうして見てくると分かるように、何歳がいいという客觀的な基準があるわけではなく、白居易はそれぞれの時期において現在の年齢を老若の中間にある最も好ましい時期として満足しているのである。」という指摘がある。更に、白居易作品には「非A亦非B」という句式が大量に見られることを指摘し、これは白居易が、「事物を對立の相において捉えず、本來對立しあう關係にあるものすら、その對立關係を解消させてしまふ態度」を持つてゐるからだ、とされている。このように、生涯通じて一定した思想を持つことにより、類似する句式や表現を繰り返し使うことは、白居易作品の特徴の一つと考えて良いだろう。

⑫ ここで言う「有」字句は、表現として共通する役割、あり方をしていふと言ふ判斷の下、分類・考察したものを言う。同じ分類の中にあつても、各作品毎の「有」字句の具體的な表れ方は様々であるが、それらを句形などによつて機械的に分けることはしていない。

⑬ 同様の表現を使う作品として、以下の詩が挙げられる。ただしこの作品は、ひたすら忙しい日常を描くものであり、本文で挙げた作品とは雰囲気異なる。

不覺百年半

覺えず百年の半ばなるを

何曾一日閑

何ぞ曾て一日閑ならん

朝隨燭影出

朝は燭影に隨いて出で

暮趁鼓聲還 暮は鼓聲を趁<sup>お</sup>いて還る

甕裏非無酒 甕裏 酒無きに非ず

牆頭亦有山 牆頭 亦た山有り

歸來長困卧 歸來 長に困卧し

早晚得開顏 早晚 開顏を得んや

- ⑭ 「暮歸」詩 長慶元年 長安〔卷十九 律詩・1247〕  
同様の作品はもう一例ある。

昔爲鳳閣郎、今爲二千石。自覺不如今、人言不如昔。

昔雖居近密、終日多憂傷。有詩不敢吟、有酒不敢喫。

今雖在疏遠、竟歲無牽役。飽食坐終朝、長歌醉通夕。……

- ⑮ 「詠懷」詩 長慶二年 杭州〔卷八 閑適・0359〕  
その他の例は以下の二首。

有官慵不選、有田慵不農。屋穿慵不葺、衣裂慵不縫。

有酒慵不酌、無異樽長空。有琴慵不彈、亦與無絃同。……

〔詠慵〕詩 元和九年 下邳〔卷六 閑適・0260〕

有酒病不飲、有詩慵不吟。頭眩罷垂釣、手痺休援琴。……

〔病中宴坐〕詩 開成四年 洛陽〔卷三六 半格詩 律  
詩附・3525〕

- ⑯ この「慵」という語に關しては、菅野禮行「白居易の詩における「慵」と「拙」(上)・(下)」「(上)：『漢文教室』五一號、一九八五年九月、(下)：同五四號、一九八五年、十二月〕に、白居易は詩文の中でこの「慵」字を特に好んで使い、詩的主題としても扱うが、これはそれまでの文學史上例を見

ないということが指摘されている。同研究では他に、白居易の「慵」には嵇康の處世態度や作品の影響が見られること、「慵」としばしば對になって使われる言葉は「拙」であり、「拙」世渡り下手(こちらに代表される人物は阮籍)という概念が「慵」を支えていたこと、などが論じられている。

- ⑰ 「ここぞ老いを終えたいものだ」とする、肯定的な「終老」の用例としては、江州期に書かれた詩文が最も早い例である。本文第二章「序文と本文」に引いた「香爐峰下新置草堂即事詠懷題於石上」詩などの例がある。